令和３年度東京都広報コンクール　写真部門　総評

鳥原委員

2021 年は長引くコロナ禍によって、昨年に引き続き、さまざまな大規模イベントが中止になりました。全般的な印象として、どの広報誌もこの困難な状況にもよく対応し、写真に工夫を凝らし制作されているという印象を持ちました。

この時期、求められているのは生活に資するより正確な情報と、それに分かりやすいイメージです。ときに相反するふたつ要素をいかに両立し提示することができているのか、審査のポイントはそこでした。

まず被写体として目立ったのは“子ども”と“自然”でした。子どもがさまざまな行事に取り組む表情に“希望”というメッセージを込めています。一枚写真では足立区、福生市、瑞穂町、日の出町、組み写真では八王子、中野区などが強く印象に残りました。いずれもシャッターチャンスを的確にものにしていることに感心しました。

シャッターチャンスは、撮影に集中するだけでは得られません。その表情を引き出し、背景を整理し、光の状況を想定するなどの配慮が必要です。事前に撮影現場のシチュエーションをどれだけシミュレーションしたのかに掛かっているのです。

レイアウトについては事前にデザイナーと設定しておくべきだと思います。それができていればシミュレーションが容易になります。じっさい、写真は良いのに、レイアウトでそれが十分に発揮されていない例が散見されます。

自然を写した写真については、組み写真では板橋区、練馬区、足立区、一枚写真では千代田区、狛江市、羽村市が目立ちました。市街地への外出が憚れる昨今、身近な自然についての情報は救いとなります。

自然の造形や色彩を描写するのはプロの写真家でも難しいことですが、一枚写真においてはしっかりと取り組まれた成果が出ています。ただ組み写真については、レイアウト上の工夫がもう少し欲しいところでした。

レイアウトについては、文字情報と写真のバランスにも注意すべきです。キャプションや解説が丁寧過ぎると、煩瑣で分かりにくくなります。写真を効果的に使いテーマへの注目を高めるためには、できるだけ簡潔な文章とフォントを心がけてください。ことに近年の傾向として、文字が小さく多いと、手に取ること自体が敬遠されがちなのです。

今回、私が高く評価したいのが一枚写真では足立区、組み写真では目黒区と足立区の取り組みです。目黒区の紙面からは良いものを作り、届けたいと言う担当者の熱意が伝わってきました。アイデア出しから撮影、レイアウトまで一貫したポリシーが感じられます。また足立区の紙面は、写真の効果を良く知っているという印象を受けました。見事です。

　写真は事実を説明するよりも、実感を伝えるのに向いています。その実感の表現が読者を惹きつけ、情報に誘導するのです。これからも、その力を大いに活用してください。

鳥原学

箭内委員

「令和 3 年度東京都広報コンクール・写真部門」。本年度は 12 区 11 市 2 町、計 25 市町村から、多数の力作をご応募いただきました。皆さまお忙しい中、広報活動の発展・向上にご協力を賜り、誠にありがとうございました。

さて、時節柄、前年度の作品には「コロナ禍での日常」という共通のテーマが多く見られましたが、今年度はコロナ禍以外のテーマも段々と戻って参りました。
しかし、それでもやはり重要トピックスであるコロナ禍関連は今年度も多かったわけですが、前回と大きく異なった点は、今年度は閉塞感からの脱却や、少しでも住民の皆さまに癒しや希望を持って欲しいという、前向きなメッセージが込められた作品が多く集まったという点です。

例えば、一見コロナ禍と直接には関係のない「自然」を扱った作品であったとしても、その背景には、少しでも記事の自然風景から癒しを感じて欲しい、机上の散策を楽しんで欲しいといったような、制作者の強い意図・想いが込められていました。

そして、もう一つの大きな変化は、現場での判断によって、被写体人物のマスク着脱が臨機応変に行われるようになった、という点です。私個人的には、この判断を好意的に受けとめました。そのため、作品評価にも反映させて頂きました。

ただし、当然ながら、当人の健康状態、取材現場の密の状況、取材時期、感染状況を考慮したうえでの賛成意見です。企業・店舗・施設等の屋内では、引き続きマスク着用を推奨すべきだと考えています。
しかし、取材現場が畑や野山や、周囲に人のいない屋外であった場合には、被写体のイキイキとした表情を記録するためにも、短時間マスクを外すことは意義のあることだと感じます。この判断を、各制作者が今年度は率先して行ったという点は、大いに評価すべきだと感じました。

次に、技術面に触れてみたいと思います。
昨年同様に、スマホでの撮影がまったく無くなり、デジタル一眼レフカメラやミラーレスカメラを駆使して撮影されるケースが多く見られたのが印象的でした。私は今回で 3 回目の審査を担当させて頂いたわけですが、初回に比べて、カメラ設定、撮影データを詳しく記載し、ご提出くださる自治体が増えたように感じています。

近年のカメラ機材の進歩は著しく、カメラ任せで簡単に良い写真が撮れてしまいます。しかし、やはり「撮れる」のと「撮る」のとは明らかに違いますから、そこに明確な撮影者の意図があると分かり、その意図が作品にうまく反映していれば、当然、審査の評価は高くなります。

とはいえ、広報コンクールはカメラの撮影技術ばかりを競うものではありませんので、そこに評価のベクトルが向かっているわけではありませんが、ただやはり、技術の向上と広報紙面の訴求力・メッセージ性は繋がりのあるものですので、今回ご参加いただいた皆さまには、今後さらなる技術向上を目指して頂き、住民の皆さまのために、より良い広報紙づくりに力を注いで頂けたら幸いです。

以上、本年度もご応募頂いた作品と真摯に向き合い、客観的に審査させて頂きました。素敵な作品を拝見させて頂き、誠にありがとうございました。